

自宅内での転倒が増加し、家族の介護負担が増加した症例 ～新人セラピスト1年間の関わり～

尼崎市・野村医院 前田 晃英（理学療法士）

今回担当させて頂いた症例様は80代女性、自宅での転倒が増えたため、平成29年5月より理学療法目的で当院受信、運動器不安定症にて理学療法開始となる。既往に腰部ヘルニアがあり、合併症に糖尿病、高血圧症がある。血圧の変動は激しい。

著明な可動域制限や筋力低下は無く、歩容は前のめりで恐る恐る行い、安全性・安定性の低下が見られる。

屋外シルバーカー歩行練習を行い始めた今年1月、自宅にて転倒し大腿骨頸部骨折を受傷。他院にて大腿骨頭全置換術施行となる。その後、リハビリ目的で転院し、3カ月後には屋外独歩可能となる。しかし、退院後自宅に戻ると歩行困難になったため、5月より当院にて理学療法再開となる。程なくして、自宅での歩行動作の安全性向上を目的に訪問リハビリへと変更となる。

通院から入院、訪問と1年間関わっていく中で、医療、介護、福祉と連携し専門職としてどのように考え携わっていくかについて、貴重な経験を得たのでここに報告する。